

Eureka VII

六年制通信 No. 2 平成31年4月12日(金)号

個性より大切なもの

これからは個性尊重の時代であると言われてもうずいぶんになります。世界的に見ると日本人の特徴は没個性で、そもそも昔から個性的であることを嫌うと、これは悪口として当時マスコミなどで喧伝されていたものです。皆と同じことをしてはならない、自分の個性を伸ばすのだ、教育はその邪魔をしてはならない、など私も何度も聴かされました。ですから、君たちも個性的であることが大事なのだと教えられてきたのではないのでしょうか。ナンバーワンよりオンリーワン、そんな歌も流行りました。ありのままがいい、そんな言葉もありました。ありのままがいいわけがないのに、私たちはこういう耳あたりの良い、心地よいフレーズに弱いですね。これこそ残念ながら日本人の特徴だと、私は思います。

個性のない人間はいません。個性くらい誰にだってあります。オンリーワンには何の努力なしになれます。すでになっています。君と同じ人間はどこにもいないのですから。それに、ありのままによければ、動物のように生きるしかありません。

個性を伸ばせというのも危険な言葉です。個性と才能は違います。個性などというものに頼ってはいけません。個性は克服するものです。将棋の羽生さんは才能に恵まれてもいたのですが、ものすごい努力をしたはずです。羽生さんはどういう個性をお持ちか、それは知りません。しかし、おそらく彼は、将棋が強くなるためにマイナスに働くような自己の個性と闘って、それを克服してきたに違いないと私は考えています。伸ばすべきは才能で、どのような才能があるのかを若いうちに見つけ、常人以上の努力を続け、個性に勝った人を天才と呼ぶのです。

私は若い君たち（あるいは社会人になりたての人、仕事を始めたばかりの人）に個性的であれとは言いません。もっと素直であれと言いたいと思います。世の中の営みや他人の意見に対して批判的であることが立派であるかのように言う人がいますが、それは大人になってからで十分です。若いうちは、孟子の言うように「浩然の気を養う」ことの方が圧倒的に大切です。「浩然の気」というのは、孟子自身も説明しがたいと言いながら難しい話（興味のある人は『孟子』の「公孫丑章句上」を読んでごらん）をしているのですが、要するに「おおらかで素直な心」と考えていいと思います。

おおらかで素直な心を養うなんて簡単だと思いますか。いやいや、これが実は大変難しいことなのです。素直であるということと従順であるということとは違います。自分の考えを捨てて何でも相手の言うことに従うことを素直というわけではありません。物事を素直に見る、そのままの正しい状態をとらえるという意味で言っているのです。

素直であることを妨げるのは、自分のこだわりです。何か別のことにとらわれてしまう弱い心です。大人になると、本質とは違う周辺の事情にとらわれることが多くなります。たとえば、物欲の強い人はたくさんいますが、そういう人は物事の本質を素直に見ることはできません。何を見ても、自分の物欲を満たすためにはどうするかという観点で見てしまうからです。

若い君たちにも、ひょっとしたら自分の素直な目を曇らせる「とらわれている何か」があるかもしれませんね。多くの場合、それは過剰な自意識なのかもしれませんが、それらを取り払い、曇りなき眼で物事の本質を見て正しい判断をし実行する、そういう素直な心を持った人になろうとして下さい。ところが「とらわれている何か」を持っている人ほど、それに気づかないものです。そこがまた難しいのですね。

私には尊敬する軍人がいます。彼に仕え、身近に接した人がのちに彼のことを「私心のない水晶のような人」と評しています。彼は昭和の大戦の折り、終戦に向けて何度も重要な判断をしていくのですが、伝記を読んでもおおらかで素直な方だというのがわかります。君たちも遠からず社会に出て、様々な難しい現象に出会うことでしょう。でも、おおらかで素直な心を持っていれば、正しい判断ができると思いますよ。

今週のおすすめ

・後藤正治 『奇蹟の画家』 (講談社文庫)

私は昔から絵画を見る目が全くありません。ピカソやゴッホのように美術の教科書に載っている作品を見ても、何がいいのか全く分からない。ただ、唯一、どういうわけかミレイの「オフィーリア」だけは飽きることなく見ていられます。今も友人がくれたレプリカをデスクの上に置いて、眺めながらこれを書いています。オフィーリアはハムレットの妃候補でヤナギの木から小川に落ちて死ぬのですが、ミレイはそれを美しく描いています。画家の目には、同じ緑色でもどれほどの種類の緑が見えているのでしょうか。そんな感想がいつも浮かんできます。

さて、後藤正治のノンフィクションは『遠いリング』が一番好きなのですが、市井に埋もれていた画家の石井一男を追ったこの『奇蹟の画家』も面白かったなあ。文庫本の裏表紙に解説の白石一文が「絵を見て泣いたことがありますか？」と書いているのですが、私は思わず、ない、と答えていました。後藤さんはこの本で、海文堂ギャラリーの島田誠に見出された石井の作品と生活を細かく紹介しているのですが、もし島田との出会いがなかったら、恐らく石井本人も美しい作品も世に出ることはなかっただろうと思われます。石井の描く多くの女性像は島田の命名で「女神たち」と呼ばれるのですが、これらを見て涙を流す人たちがいたらいいですね。

『奇蹟の画家』には島田誠の書いた『無愛想な蝙蝠』が紹介されていたので、ついでに読んでみました。これは島田初のエッセイ集で、感心したのは非常に文章が簡潔でうまいこと。1993年発行だから古書店で探すしかなさそうだけど、読みたかったら私のお貸ししますよ。

BGMは 原田真二 の ていーんず ぶるーす でした…。